E-ASIA
university of oregon libraries
http://e-asia.uoregon.edu

妖怪研究

伊東忠太

初出：「日本美術」
1917（大正 6）年

妖怪研究

伊東忠太

一　ばけものの起源

　妖怪《えうくわい》の研究《けんきう》と云《い》つても、別《べつ》に專門《せんもん》に調《しら》べた譯《わけ》でもなく、又《また》さういふ專門《せんもん》があるや否《いな》やをも知《し》らぬ。兎《と》に角《かく》私《わたし》はばけものといふものは非常《ひぜう》に面白《おもしろ》いものだと思《おも》つて居《ゐ》るので、之《これ》に關《くわん》するほんの漠然《ばくぜん》たる感想《かんさう》を、聊《いさゝ》か茲《こゝ》に述《の》ぶるに過《す》ぎない。

　私《わたし》のばけものに關《くわん》する考《かんが》へは、世間《せけん》の所謂化物《いはゆるばけもの》とは餘程《よほど》範圍《はんゐ》を異《こと》にしてゐる。先《ま》づばけものとはどういふものであるかといふに、元來宗教的信念又《ぐわんらいしうけうてきしんねんまた》は迷信《めいしん》から作《つく》り出《だ》されたものであつて、理想的又《りさうてきまた》は空想的《くうさうてき》に或《あ》る形象《けいしやう》を假想《かさう》し、之《これ》を極端《きよくたん》に誇張《こてう》する結果勢《けつくわいきほ》ひ異形《いげう》の相《さう》を呈《てい》するので、之《これ》が私《わたし》のばけものゝ定義《ていぎ》である。即《すなは》ち私《わたし》の言《い》ふばけものは、餘程範圍《よほどはんゐ》の廣《ひろ》い解釋《かいしやく》であつて、世間《せけん》の所謂化物《いはゆるばけもの》は一の分科《ぶんくわ》に過《す》ぎない事《こと》となるのである。

世間《せけん》で一口《くち》［＃ルビの「くち」は底本では「くに」］に化物《ばけもの》といふと、何《なに》か妖怪變化《えうくわいへんげ》の魔物《まもの》などを意味《いみ》するやうで極《きは》めて淺薄《せんぱく》らしく思《おも》はれるが、

私の考へて居るばけものは、餘程深い意味の有るものである。特に藝術的に觀察する時は非常に面白い。

ばけものゝ一面は極めて雄大で全宇宙を抱括する、而も他の一面は極めて微妙で、殆ど微に入り細に渉る。即ち最も高遠なるは神話となり、最も卑近なるはお伽噺となり、一般の學術特に歴史上に於ても、又一般生活上に於ても、實に微妙なる關係を有して居るのである。若し歴史上又は社會生活の上からばけものといふものを取去つたならば、極めて乾燥無味［＃「乾燥無味」は底本では「乾燦無味」］のものとなるであらう。隨つて吾々が知らず識らずばけものから與へられる趣味の如何に豊富なるかは、想像に餘りある事であつて、確［＃ルビの「たしか」は底本では「たかし」］にばけものは社會生活の上に、最も缺くべからざる要素の一つである。

世界の歴史風俗を調べて見るに、何國、何時代に於ても、化物思想の無い處は決して無いのである。然らば化物の考へはどうして出て來たか、之を研究するのは心理學の領分であつて、吾々は門外漢であるが、私の考へでは「自然界に對する

人間の觀察」これが此根本であると思ふ。

自然界の現象を見ると、或[＃ルビの「ぁ」は底本では「ある」]るものは非常に美しく、或るものは非常に恐ろしい。或は神祕的なものがあり、或は怪異なものがある。之には何か其奧に偉大な力が潜んで居るに相違ない。此偉大な現象を起させるものは人間以上の者で人間以上の形をしたものだらう。此想像が宗教の基となり、化物を創造するのである。且又人間には由來好奇心が有る。此好奇心に刺戟せられて、空想に空想を重ね、遂に珍無類の形を創造する。故に化物は各時代、各民族に必ず無くてならない事になる。隨つて世界の各國は其民族の差異に應じて化物が異つて居る。

二　各國のばけもの

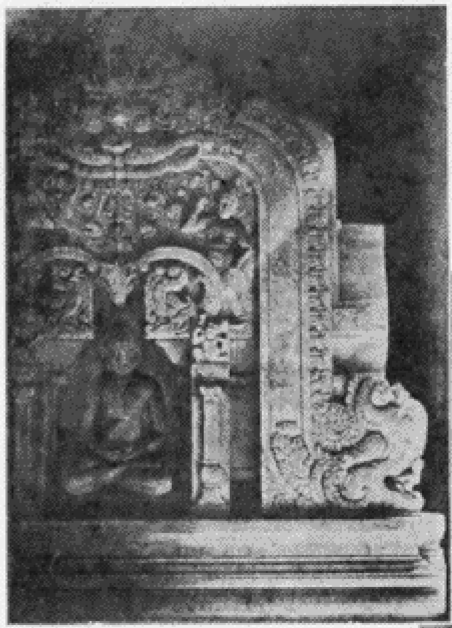
ばけものが國によりそれ／″＼異なるのは、各國民族の先天性にもよるが、又土地の地理的關係によること非常に大である。例へば日本は小島國であつて、氣候温和、山水も概して平凡で別段高嶽峻嶺深山幽澤といふものもない。凡てのものが小規模である。その我邦に雄大な化物のあらう筈はない。

古來我邦の化物思想は甚だ幼稚で、或は殆ど無かつたと言つて可い位だ。日本の神話は化物の傳説が甚だ少い。日本の神々は日本の祖先なる人間であると考へられて、化物などとは思はれて居ない。それで神々の内で別段異樣な相をしたものはない。猿田彦命が鼻が高いとか、天鈿目命が顏がをかしかつたといふ位のものである。又化物思想を具體的に現はした繪も餘り多くはない。記録に現はれたものも殆ど無く、弘仁年間に藥師寺の僧景戒が著した「日本靈異記」が最も古いものであらう。今昔物語にも往々化物談が出て居る。

日本の化物は後世になる程面白くなつて居るが、是は初め日本の地理的關係で化物を想像する餘地がなかつた爲である。其後支那から、道教の妖怪思想が入り、佛教と共に印度思想も入つて來て、日本の化物は此爲に餘程豐富になつたのである。例へば、印度の三眼の明王は變じて通俗の三眼入道となり、鳥嘴の迦樓羅王は變じてお伽噺の烏天狗となつた。又日本の小説によく現はれる魔法遣ひが、不思議な藝を演ずるのは多くは、一半は

佛教から一半は道教の仙術から出たものと思はれる。

日本が化物の貧弱なのに對して、支那に入ると全く異る、支那はあの通り尨大な國であつて、西には崑崙雪山の諸峰が際涯なく連り、あの深い山岳の奥には屹度何か怖しいものが潜んでゐるに相違ないと考へた。北にはゴビの大沙漠があつて、これにも何か怪物が居るだらうと考へた。彼等はゴビの沙漠から來る風は惡魔の吐息だと考へたのであらう。斯くて支那には昔から化物思想が非常に發達し中には極めて雄大なものがある。尤も儒教の方では孔子も怪力亂神を語らず、鬼神妖怪を説かないが道教の方では盛に之を唱道するのである。



右上　西藏の佛像
右下　埃及の神像
左上　後漢武梁祠畫像石
左下　シヤヴアのナヤンザ・サリ

形（かたち）に現（あら）はされたもので、最（もつと）も古（ふる）いと思（おも）はれるものは山東省（さんとうしやう）の武氏祠（ぶしし）の浮彫（うきぼり）や毛彫（けぼり）のやうな繪（ゑ）で、是（これ）は後漢時代（ごかんじだい）のものであるが、其（その）

化物は何れも奇々怪々を極めたものである。山海經を見ても極めて荒唐無稽なものが多い。小説では西遊記などにも、到る處痛烈なる化物思想が横溢して居る。歴史で見ても最初から出て來る伏羲氏が蛇身人首であつて、神農氏が人身牛首である。恁ういふ風に支那人は太古から化物を想像する力が非常に強かつた。是皆國土の關係による事と思はれる。

更に印度に行くと、印度は殆ど化物の本場である。印度の地形も支那と同じく極めて廣漠たるもので、其千里の藪があるといふ如き、必ずしも無稽の言ではない。天地開闢以來未だ斧鉞の入らざる大森林、到る處に蓊鬱として居る。印度河、恒河の濁流は澎洋として果も知らず、此偉大なる大自然の内には、何か非常に恐るべきものが潛んで居ると考へさせる。實際又熱帯國には不思議な動物も居れば、不思議な植物もある。之を少し形を變へると直ぐ化物になる。印度は實に化物の本場であつて、神聖なる史詩ラーマーヤナ等には化物が澤山出て來る。印度教に出て來るものは、何れも不思議千萬なものばかり、三面六臂とか顔や手足の無數なものとか、

半人半獸、半人半鳥などの類が澤山ある。佛教の五大明王等も印度教から來て居る。

印度から西へ行くと、ペルシヤが非常に盛である。ペルシヤには例の有名なルステムの化物退治の神話があり、アラビヤには例の有名なアラビヤンナイトがある。埃及もさうである。洋々たるナイル河、荒漠たるサハラの沙漠、是等は大に化物思想の發達を促した。埃及の神樣には化物が澤山ある。併し之が希臘へ行くと餘程異り、却［＃ルビの「かへ」は底本では「かへつ」］つて日本と似て來る。これ山川風土氣候等、地理的關係の然らしむる所であつて、凡てのものは小じんまりとして居り、隨つて化物も皆小規模である。希臘の神は皆人間で僅にお化はあるが、怖くないお化である。夫は深刻な印度の化物とは比べものにならぬ。例へば、ケンタウルといふ惡神は下半身は馬で、上半身は人間である。又ギカントスは兩脚が蛇で上半身は人間、サチルスは兩脚は羊で上半が人間である。凡そ眞の化物といふものは、何處の部分を切り離しても、一種異樣な形相で、全體としては渾然一種の纏まつ

た形を成したものでなければならない。然るに希臘の化物の多くは斯の如く繼合せ物である。故に眞の化物と言ふことは出來ないのである。然らば北歐羅巴の方面はどうかと見遣るに、此方面に就ては私は餘り多く知らぬが、要するに幼稚極まるものであつて、規模が極めて小さいやうである。つまり歐羅巴の化物は、多くは東洋思想の感化を受けたものであるかと思ふ。

以上述べた所を總括して、化物思想はどういふ所に最も多く發達したかと考へて見るに、化物の本場は是非熱帶でなければならぬ事が分る。熱帶地方の自然界は極めて雄大であるから、思想も自然に深刻になるものである。そして熱帶で多神教を信ずる國に於て、最も深刻な化物思想が發達したといふ事が言へる。縱令熱帶でなくとも、多神教國には化物が發達した。例へば西藏の如き、其喇嘛教は非常に妖怪的な宗教である。斯樣にして印度、亞剌比亞、波斯から、東は日本まで、西は歐羅巴までの化物を總括して見ると、化物の策源地は亞細亞の南方であることが分るのである。

尚化物に一の必要條件は、文化の程度と非常に密接の關係を有する事である。化物を想像する事は理にあらずして情である。理に走ると化物は發達しない。縱令化物が出ても、其は理性的な乾燥無味なものであつて、情的な餘韻を含んで居ない。隨つて少しも面白味が無い。故に文運が發達して來ると、自然化物は無くなつて來る。文化が發達して來れば、自然何處か漠然として稚氣を帶びて居るやうな面白い化物思想などを容れる餘地が無くなつて來るのである。

三　化物の分類

以上で大體化物の概論を述べたのであるが、之を分類して見るとどうなるか。之は甚だ六ケしい問題であつて、見方により各〱異る譯である。先づ差當り種類の上からの分類を述べると、

（一）神佛（正體、權化）

（二）幽靈（生靈、死靈）

（三）化物（惡戲の爲、復仇の爲）　（四）精靈　（五）怪動物

の五となる。

（一）の神佛はまともの物もあるが、異形のものも多い。そして神佛は往々種々に變相するから之を分つて正體、權化の二とすることが出來る。化物的神佛の實例は、印度、支那、埃及方面に極めて多い。釋迦が［＃「釋迦が」は底本では「釋迦か」］既にお化けである。卅二相を其儘現はしたら恐ろしい化物が出來るに違ひない。印度教のシヴアも隨分恐［＃ルビの「おそろ」は底本では「おそ」］しい神である。之が權化して千種萬樣の變化を試みる。ガネーシヤ即ち聖天樣は人身象頭で、惡神の魔羅は隨分思ひ切つた不可思議な相貌の者ばかりである。埃及のスフインクスは獅身人頭である。埃及には頭が鳥だの獸だの色々の化物があるが皆此内である。此（一）に屬するものは概して神祕的で尊い。

化物の分類の中、第二の幽靈は、主として人間の靈魂であつて之を生靈死靈の二つに分ける。生［＃ルビの「い」は底本では「き」］きながら魂が形を現はすのが生靈で、源氏物語葵の巻の六條御息所の生靈の如きは即ち夫である。日高川の清姫などは、生きながら蛇になつたといふから、之も此部類に入れても宜い。

死靈は、死後に魂が異形の姿を現はすもので、例が非常に多い。其現はれ方は皆目的に依つて異なる。其目的は凡そ三つに分つことが出來る。一は怨を報ずる爲で一番怖い。二は恩愛の爲で寧ろいぢらしい。三は述懷的である。一の例は數ふるに遑がない。二では謠の「善知鳥」など、三では「阿漕」、「鵜飼」など其適例である。幽靈は概して全體の性質が陰氣で、凄いものである。相貌なども人間と大差はない。

第三の化物は本體が動物で、其目的によつて惡戲の爲と、復仇の爲とに分つ、惡戲の方は如何にも無邪氣で、狐、狸の惡戲は何時でも人の笑ひの種となり、如何にも陽氣で滑稽的である。大入道、一つ目小僧などはそれである。併し復仇の方は鍋島の猫騷動のやうに隨分しつこい。

第四の精靈は、本體が自然物である。此精靈の最も神聖なるものは、第一の神佛の部に入る。例へば日本國土の魂は大國魂命となつて神になつてゐる如きである。物に魂があるとの想像は昔からあるので、大は山岳河海より、小は一本の

草、一朶の花にも皆魂ありと想像した。即ち「墨染櫻」の櫻「三十三間堂」の柳、など其例で、此等は少しも怖くなく、極めて優美なものである。

第五の怪動物は、人間の想像で捏造したもので、日本の鵺、希臘のキミーラ及グリフィン等之に屬する。龍麒麟等も此中に入るものと思ふ。天狗は印度では鳥としてあるから、矢張此中に入る。此第五に屬するものは概して面白いものと言ふことが出來る。

以上を概括して其特質を擧げると、神佛は尊いもの、幽靈は凄いもの、化物は可笑しなもの、精靈は寧ろ美しいもの、怪動物は面白いものと言ひ得る。

四　化物の表現

此等樣々の化物思想を具體化するのにどういふ方法を以てして居るかといふに、時により、國によつて各々異なつてゐて、一概に斷定する事は出來ない。例へば天狗にしても、印度、支那、日本皆其現はし方が異なつて居る。龍なども、西洋のドラゴンと、印度のナーガーと、支那の龍とは非常に現し方が違ふ。併し凡てに共通し

た手法の方針は、由來化物の形態には何等か不自然な箇所がある。それを藝術の方で自然に化さうとするのが大體の方針らしい。例へば六臂の觀音は元々大化物である、併し其澤山の手の出し方の工夫によつて、其手の工合が可笑しくなく、却つて尊く見える。決して滑稽に見えるやうな下手なことはしない。此處に藝術の偉大な力がある。

此偉大な力を分解して見ると。一方には非常な誇張と、一方には非常な省略がある。で、これより各論に入つて化物の表現即ち形式を論ずる順序であるか、今は其暇がない。若し化物學といふ學問がありとすれば、今まで述べた事は、其序論と見るべきものであつて、茲には只序論だけを述べた事になるのである。

要するに、化物の形式は西洋は一體に幼稚である。希臘や埃及は多く人間と動物の繼合せをやつて居る事は前に述べたが、それでは形は巧に出來ても所謂完全な化物とは云へない。ローマネスク、ゴシツク時代になると、餘程進歩して一の纏まつたものが出來て來た。例へば巴里のノートルダムの寺塔の有名な怪物は繼合物で

はなくて立派に纏まつた創作になつて居る。ルネツサンス以後は論ずるに足らない。然るに東洋方面、特に印度などは凡てが渾然たる立派な創作である。日本では餘り發達して居なかつたが、今後發達させようと思へば餘地は充分ある。日本は今藝術上の革命期に際して、思想界が非常に興奮して居る。古今東西の思想を綜合して何物か新しい物を作らうとして居る。此機會に際して化物の研究を起し、化物學といふ一科の學問を作り出したならば、定めし面白からうと思ふのである。昔の傳説、様式を離れた新化物の研究を試みる餘地は屹度あるに相違ない。（完）

（大正六年「日本美術」）

底本：「木片集」萬里閣書房
1928（昭和3）年5月28日発行
1928（昭和3）年6月10日4版
初出：「日本美術」
1917（大正6）年
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：鈴木厚司
校正：しだひろし
2007年11月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。